

MEMOIRE
メモワール

夏木康志

目次

プロローグ	1
メモワール-記憶-	1
NonName-名もなき追悼文-	4
さらば我が祖母よ	7
オヤジが死んだ	7
奥付	
奥付	10

プロローグ

メモワールとはフランス語で記憶を意味します。

亡くなった祖母や叔母の思い出を、上手く詩やエッセイにできないかと考えて

書きました。

死者を悼むという意味の作品です。

人間にとって、重要なファクターは愛別離苦だと言います。

つまり、親しい人と別れる苦しみが、人生にはついてまわるものです。

哀悼をこめて。

メモワール-記憶-

今まで読んだ小説の中で基本設定がありえないと思ったのが井上靖先生の『しろばんば』だ。主人公の洪作少年はぬいという「祖母」と一緒に暮らしている。しかし、その「祖母」は実は血の繋がりのない曾祖父の愛人であった。物語の舞台は戦前であり、当時は血の繋がりのない女性を祖母として慕っている洪作少年の設定も、彼を坊と呼んで溺愛するおぬい婆さんの「契約関係」とも言うべき不思議な愛情のやり取りも、自分とは無関係だと思っていた。しかし名作と呼ばれる文学作品は一見あり得ないと思えるような設定からも、虚構の真実を引き出しているものだ。

『しろばんば』のように、私も祖母との最後の記憶をまとめてみたい。

祖母との記憶で、物心着いた時に残っているのは、妹が生まれる時だ。当時は弟がまだ一才程度で、我が家の5番目として妹が加わろうとしていた。そこで、東北のとある県から、おそらく飛行機でやって来たのが祖母だった。要するに一時的に俺たち兄弟の面倒を見に来てくれていた。約700キロの距離を越えて。

祖母は若い頃、横浜近辺で働いていたと聞いたことがある。それからおそらく同じ村出身の祖父と結婚して、6人の子をもうけた。その末っ子が父だ。ずっと父の生家では農業を営んでおり、コメや長芋、ネギ、それにニンニクなどを生産している。父の生家では長男の伯父がイエを継ぎ、父は関東のとある県に高校を卒業すると就職していた。

妹が生まれる時は、俺は3歳だった。その後、さらに四半世紀俺たちの縁は続いた。

最後の祖母との思い出は、一番印象に残っているのが祖父の葬式の時だ。イエには居間に「齢の110を迎えたなら、そろそろ譲ろうか日本一」なる長寿の標語の暖簾があり、てっきり最低100歳までは祖父母は長生きするんだろうと思っていた。でも、祖父は90歳前後で亡くなってしまった。

祖父が亡くなって一族が集合した時、俺は祖母にもし海外旅行に行くなら、どこに行きたいか？ と聞いた。「海外？ 嫌だな。飛行機が。ワシは死ぬのが怖い。」

もう90近くまで生きて、飛行機が落ちることや、死ぬのが怖いと真顔で言う祖母が意外だった。そして約一年後、祖母も祖父の所へ旅立った。

俺は祖母が亡くなった時、いや、祖父が亡くなった時点で、相当ショックを受けた。祖父が亡くなったのは、俺にとってはじめて身内を失った時だ。さらに「死ぬのが怖い」と真顔で言っていた祖母がわずか一年で、祖父のところに行ったのも相当こたえた。

だいたい成人すると田舎で親族が一同に会するのは結婚式か葬式くらいのものだ。従兄弟はほとんど結婚してしまったので、最後に田舎で行われた従兄弟の結婚式から祖父が亡くなるまで、約3年間会いに行っていなかった。

俺は祖母がガンにかかったと聞いてから、亡くなる数ヶ月前に父と見舞いに行った。必死に手を握っても祖母の意識は回復しなかった。次の日に俺たちが手を握ると、祖母は意識を取り戻した。

目が覚めた祖母は唐突に俺に3万円を渡した。その金を受け取るとを断ろうとしたが、こう言った。「金を受け取らないと、孫子の縁を切る」と。結局、その3万円を何に使ったかも忘れたが、後になってみれば、孫子の縁がそれで繋がったなら、少し救われた気がした。

祖父母の時代には太平洋戦争があり、祖父も戦争に行き帰って来た。たまに夜中に戦争を思い出して突然うなされることがあったらしい。俺の世代ではアジア出身の留学生とも親友になり、時代は大きく変わったと思いたい。

日本の戦後の高度経済成長は、平和な時代が続いたため、でもある。その後、戦後から災後に世の中は変わりつつある。

この大震災の数年前に祖父母共に亡くなったことは、不幸中の幸いだったかもしれない。震災で一番ダメージを受けやすいのは高齢者や乳幼児だからだ。

祖父母の時代には関東大震災があり、太平洋戦争があった。だが震災と違って、戦争は政府の立ち回りで事前に抑止出来る可能性がある。

俺は祖父が戦争の時、どこに出征したか、知らない。その質問は何となく一族の中でもタブー視されていた。おそらく南方かシベリアのどちらかだろう。いや、生きて帰って来ているところを考えるとシベリアか。

90歳近くになって、死ぬのが怖いと真顔で語った祖母。死ぬ瞬間の苦しみが怖いのか、それとも自分の存在がなくなることが怖いのか、それとも死後の世界が怖いのかは想像出来なかった。たぶん答えはその真ん中だろう。祖父が亡くなった時、「オレには玄孫(やしゃご)までいる」と祖母は豪語していた。だが、統計的に言って、自分の子孫に孫、曾孫、さらに玄孫までいる場合は、年齢的にそろそろ死を覚悟しなければならないのも

事実だろう。玄孫まで DNA を繋げても、なお人間は死ぬのが怖い。

東北地方の習慣では、故人の遺影と位牌をその生家と菩提寺の両方に保存しているようだ。もう写真と位牌の中の人になってしまった祖父母の墓に、私もそろそろお参りに行きたい。

NonName-名もなき追悼文-

別れは唐突に

もっと長生きすると思っていた

あなたはまだ若かった

誰からも愛される人柄であった

真顔で怒ったことは、長い付き合い上

一度もなかった

長い付き合いといっても

30年以上になる

私も今ではあなたの立場が半分わかる

かつてあなたから見た私は、

今では私からみた甥のようだから

仏教では、本当は天国など存在しないと教える

代わりに極楽浄土があると

別れの席でわかった、あなたたちの信仰

もし天国のような遠いところがあるのなら

あなたもきっとそこにいるはず

今でも目をつむれば浮かぶ、あなたの笑顔

永久の別れの時に、人の真価がわかるという

後まで続く会葬の列

それが全てを物語る

遺影の候補になった写真はすべて笑顔だった

どの写真も、唯一の難点はお気に入りのバッグを

肩にかけて写っていたことだ

また会いたい、とは願わない、会えるとも思わない

そうしようと決めた春のおわり

もうすぐ真夏がやってくる

あなたは今年の夏を待てなかった

最後に最愛の人と花見が出来たのだから

それにまさる春は、もう来ない。

いずれ行きますあなたの墓標

今は心で手を合わせるだけ

ある人はいう、あなたのために植樹したいと

きっと桜の木がいいだろう

いいえ、あなたの名前を挙げたりはしない

名もなき追悼文

心の中であなたの顔を思い浮かべながら

さらば我が祖母よ

あなたのことを本当の祖母だと思っておりました。

実際、祖父は再婚していた。

でも、あなたは本当の祖母のように、私に愛情を注いでくれました。

去年の今頃は、あなたはまだ生きていましたね。

はじめて身内を失った時から、約 15 年が経ちました。

もうそこまで、あの時ほどには、身内を失っても、私は傷つかなくなりました。

あなたが天国に行っても、耐えられたのですから。

最後は、自宅で迎えたいと願っていたあなた。

そして、認知症を患ってしまったあなた。

あなたのことを本当の祖母だと思っておりました。

オヤジが死んだ

オヤジが死んだ。

といっても、実の父ではなく、オヤジと慕っていたマスター時代の恩師である。

オヤジは親分肌で、アジア経済論および経済発展論の大家であった。

何よりも酒（泡盛）とタバコを愛していた。

はじめてオヤジの研究室を訪ねた時、アロー&ハーンの『一般均衡理論』と永谷敬三先生の『貨幣経済の理論』を読むことから始めると指導してもらった。

経済学は選択の学問だ。全てを求めると努力が発散してしまう。

日本人はアジアを離れては、いかん。

外国語を勉強したい？ それにはまず英語からだ。日本人が初めて接する外国語である英語の学習に、外国語学習のヒントは隠されている。

卒業論文を書き、大学院に送り出してもらった恩師。

マスター時代のオヤジと慕っていた恩師。

さらに主査のボスを含めて、三人の学部長・研究科長経験者を含めて、審査いただいた博士号。

オヤジが生きていた、元気な時に博士号を授与されてよかった。

もうオヤジには会えない。

オヤジが死んで一ヶ月経過した今、オヤジの書いた『開発経済論』や『現代アジア経済論』を読み返している。

もうオヤジには会えない。

が、少しでもオヤジの学恩に報いるよう、努力したいと思う。

奥付

奥付

メモワール

<https://puboo.jp/book/48653>

著者：夏木康志

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/ynatsuki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/48653>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48653>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

メモワール

著 夏木康志

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
